

# 都市からみる中国の現代性

—— 『從城市看中国的現代性』 導論 ——

王 標 (原著: 巫 仁恕)

中国近現代の歴史の変遷の過程においては、都市は疑いもなく重要な役割を果たした。まず、明清以降、とりわけ19世紀半ば以後、都市の数が次第に増加し、規模も次第に拡大した。このような迅速な都市化現象は一種の新時代の到来を表している。中国農村の長期停滞の発展状況に比べると、鮮明な対照をなし、中国近代史における都市の重要性が一層明確に現れている。さらに、思想の面からしても、近代都市は新しい観念が発生する温床であると同時に、新しい事物の試験場であり、また国家歳入財源の重要な基盤である。従って、中国近代史の発展と変遷を論ずるとき、都市の重要性を避けてはいけなだけでなく、都市史の角度から、歴史変遷の探求により多くより重要な手がかりを提供できる。

近現代中国都市史研究は数十年の発展を経て、現代化の角度から、都市建設、都市計画、都市行政管理そして都市衛生などの面を研究し、その上さらに都市と国家との関係、都市コミュニティの自治などの課題を検討し、都市歴史の研究に堅固な基礎を定めた。台湾の近代中国都市史研究は、欧米と大陸の学界に比べ、決して優れたものとは言えない。かつて中央研究院近代史研究所は中国現代化の地域研究に力を注ぎ、その研究の重点は都市研究に置かなかったが、われわれに多くの貴重な財産を残した。先輩たちの研究に基づき、本研究所は2005年4月に都市史研究チームを創立し、2007年6月28日29日に「都市からみる中国の現代性」という国際シンポジウムを開催した。本書はそのシンポジウムの成果である。  
訳注1)

本書は「現代化」に代えて「現代性」という言葉を用いている。この言葉を好むか否かを問わず、当時の社会全体が「現代性」を追求したことを否定できない。現代性は都市の中で特に顕著であり、都市化はまた現代性の一部であり、両者は互いを包摂している。本書が都市を通して現代性の問題を検討する最も重要な目的は、現代化あるいは西洋化の枠組みを越え、視野と課題を広げ、近現代都市史研究の範囲を明清時代にまで及ぼそうとすることである。

## 現代化から現代性へ： 近代中国都市研究モデルの転換

現代化の一つの重要なしるしは都市化であり、近代中国都市史の研究もこの角度から行われたのである。西洋学者は早くも1950年代から、近代中国都市研究に留意し始めた。Rhoads Murphey氏は率先して上海を近代中国変革の中心都市と見なし、そしてJean Chesneaux(謝諾)氏は近代労働者と都市プロレタリア階級を研究し、Marie-Claire Bergère(白吉爾)氏は商人とブルジョア階級を検討し、Mark Elvin(伊懋可)氏は上海の紳士権力の消長を研究した。1980年代に入り、中国大陸の改革開放に伴い、学界は研究の焦点を次第に毛沢東によって強調された農村から以前は無視された都市に移すことにより、都市史研究はさらに盛んになった。例えば、William T. Rowe(羅威廉)氏は漢口都市社会史を研究し、David Strand氏は北京の社会階層と公共圏を検討し、Elizabeth J. Perry(裴宜理)氏は上海の労働者ストライキを論じ、Emily Honig(韓起瀾)氏とGail Hershatter(賀蕭)氏はそれぞれ上海と天津の女性労働者を研究し、梁元生氏は上海の道台訳注2)を研究し、Brian G. Martin(馬丁)氏は上海の青幫を研究し、Rudolf G. Wagner(瓦格納)氏は『申報』を研究し、Christian Henriot(安克強)氏は上海市政権力の働きを検討し、またCatherine V. Yeh(葉凱蒂)氏やGail Hershatter(賀蕭)氏は都市の売春婦を研究し、Frederic E. Wakeman, Jr.(魏斐德)氏は上海の警察と闇社会を研究し、Kerrie L. Macpherson(程愷礼)氏は上海の公共衛生を研究した。<sup>1)</sup>

中国大陸の近代中国都市史に関する研究は、1980年代以降に風潮となった。上海・武漢・重慶・天津は都市史研究における四つの重要な都市であり、とりわけ上海研究は最も盛んであった。中国大陸は近代都市史を研究する時にも、都市が中国の「現代化」あるいは「近代化」に果たした役割を強調する。例えば、著名な歴史学者の張仲礼氏は「東南沿海都市と内陸都市との繋がり」は同時に集中と拡散の二重機能を有している。これらの機能を

発揮することはすなわち中国近代化の推進である」と明言している<sup>2)</sup>。魏瀛涛氏は『近代重慶都市史』の序論のなかで、近代中国都市研究は互いに推進し制約する二つの大筋があり、つまり近代都市化と都市近代化であると述べている。<sup>3)</sup>

「現代化」(modernization)は客観的な産業化の発展が資本主義の出現を促進し、そこから政治体制の変革を促進した理念である。西洋を中心としたこの一連の「現代化」理念の背後には次のような仮説が存在している。現代ヨーロッパで発展してきた近代文化と制度は、最終的にすべての現代化している社会と近代社会に全面的に受け入れられ、現代化の拡張につれ、西洋の現代文化は世界中に流行する。90年代以降、多くの研究は「現代性」(modernity)を使って「現代化」に取って代える傾向があった。その背後には中国歴史を研究する学者がだんだん以前の現代化理論の偏頗を認識したことを反映している。例えば、Bryna Goodman (顧徳曼)氏の会館と同郷会研究、関文斌氏の天津塩商と都市社会研究、Ruth Rogaski (羅美芸)氏の天津公共衛生研究などがある。<sup>4)</sup> これらの研究は我々に近代中国都市内部の変遷のさまざまな様相、特に貿易港の大都市上海がさらに研究の重点となったことを新たに教えた。最近十年間の研究はまた他の都市、例えば広州、ハルビン、成都、南通などの都市に拡大し、また国家と社会との関係、都市住民の日常生活に対して、更なる新しい研究成果が現れた。<sup>5)</sup> しかし、これらの成果は未だに「国家／社会」の分析パターンや「市民社会／公共圏」の解釈方法から完全に脱却していない。

現代化理論は次第に研究者に受容から抵抗の対象となりつつあるが、しかし現代性に対する定義もまた定論がない。西洋の歴史学界では現代性の解釈はさまざまである。大ざっぱに言えば、現代性はすでに政治・社会・思想・経済・技術・心理などの多元的な要素の混合体となり、これらの要素は十六世紀から十九世紀の間に遡ることができる。<sup>6)</sup> 例えば、多少曖昧な言い方をすれば、現代性は最近数百年來、文明が時代の変化(外部・内部を問わず)に直面し、行った自己調節であると言える。

近代都市が提供した「光、熱、力」のような現代化がもたらした一部の便利な事物、および刺激的な官能は、確かに相当な魅力があり、当時の人々を魅了した。人類学者は物質消費の角度から行った研究を通し、現代化と現代性の二つの概念を区別すべきだと指摘している。いわゆる「現代性」が強調しているのは、人々が歴史的プロセスの中で共同で経験した主観的な認知であり、自分自身は現在に属し、過去の慣習的伝統との間に断裂をと強烈に感じる認識であり、つまり過去と対立する強烈な「現在感」である。<sup>7)</sup> 従って、研究者は現代化を考察す

る際、当時の人々が主観的に追求したかあるいは抵抗したかを注意しなければならない。われわれは歴史を見る時、客観的な現代化の現象だけを検討するばかりではなく、更に当時の人びとの体験に注意しなければならない。また、近現代史の歴史変遷のプロセスの中に、現代性は単なる特定のある一つの時代、ある一つの知識人集団、ある一つの政治家グループに現れたのではなく、様々なレベル、より複雑な現代性があり、そして現代社会の中にはまた多くの非現代的な動きや活動や追求などが存在していることを注意しなければならない。

David Strand氏はJoseph Esherick (周錫瑞)編 *Remaking the Chinese City: Modernity and National Identity, 1900 to 1950*の終章の中で、近代中国都市の特徴を新しい科学技術と古い習慣との相互作用を含む新と旧との相互作用であると鋭く指摘している。以前の学者はいつも新と旧、伝統と現代という二元対立の観点を以て近代中国都市を見てきたため、逆に都市内部の広範な協力と融合の特徴が覆い隠された。<sup>8)</sup> 近年、学界で顕著に注目された「多元的現代性」(multiple-modernity)という観念は、1950年代の早期現代化理論を修正したものである。その最も重要な意義の一つは、現代性を西洋化と同一視してはならぬ、現代性の西洋モデルも唯一の「正真正銘」の現代性ではないことを示した。非西洋社会は最初の西洋現代文明社会の特定の主題と制度を用い、不断の選択・再定義・再構築を通して現代性の一部の西洋的要素を自らの新しいアイデンティティの中に統合することができるが、みずからの伝統的なアイデンティティの特殊な要素を捨てる必要はない。以前のヨーロッパの現代性の観点から世界史を評価するやり方に挑戦するだけではなく、さらにグローバルな構造から現代性が如何にしてそれぞれの異なる文化的社会の中に生まれたかを検討すべきことをわれわれに要求している。<sup>9)</sup> われわれはこの観念を使って歴史の変遷を解釈するとき、改めて近現代中国が如何にして自らの独特な現代性を構築したかを考えさせる。

「近代」あるいは「現代」という概念は、学者たちによって具体的な歴史時期区分に用いられる。それは科学的客観的歴史学が中国に導入された後に現れ、伝統と対立するものとして使われた。もしわれわれが今後、現代化理論のような目的論あるいは直線的な進歩史観でもなく、また欧米や日本の基準でもなく、現代性の角度から中国を考察しようとするれば、現代性が多元的かつ流動的なものである以上、私たちの歴史区分はより柔軟的になるのであろう。つまりわれわれは近現代史を考察する視点を阿片戦争の後に限定しなければ、「現代性」の観点は明末以来の歴史的發展をより深く理解するのに役立つかもしれない。

上述した「現代性」という観点に基づき、本書の十四



篇の論文はいずれも実証的な角度から着実な研究を行った。大きく二種類に分けられる。その一つは都市生活と文化に関する研究である。現代性を考察する学術の流れとして、以前は五四運動以来の徳先生（民主）と賽先生（科学）の思想的啓蒙と政治制度の改革を主軸にし、その後、経済・工業の発展などのマクロヒストリーを重視した。現在、比較的ミクロの日常生活の様々な側面に関心が移り、それによって社会脈絡の変遷を観察する。本書の頼恵敏氏と鄭揚文氏は、舶来品が人々の日常生活に入ったことを論じ、張寧氏は中華民国時代の上海のハイライ訳注3) 競技を研究し、連玲玲氏はジェンダーから近代上海デパートの消費文化を研究し、巫仁恕氏は蘇州の旅行空間の変遷を検討し、Peter J. Carroll（柯必徳）氏は二十世紀初めの妓女の蘇州における社会的地位を分析している。いずれの論文もこの範疇に属している。これらの日常生活の外来のあるいは新旧交錯する要素に対して、当時の人々がいかにして体験したか、それらに抵抗したかそれとも受け入れたか、われわれはどのような観点を以て考察すればいいのか。

第二種の論文は都市内部の社会関係の再調整に触れている。孫慧敏氏が検討した上海の家賃減免運動中の房客連合会、王迪氏が論じる成都市茶社商業同業公会と地方政府との関係、劉迅氏が分析した上海道教改革団体、范存武氏が分析した鄭観応の慈善活動と鸞堂組織との関係、Paul R. Katz（康豹）氏が論じる上海エリートと仏教団体との関係、徐小群氏が論じる都市内に興ったアマチュアとプロの新劇、林美莉氏が論じる近代中国の自国会計士の生計空間の開拓、岩間一弘氏が論じる上海民間企業職員の再構成と群衆運動、を含む。成都・蘇州・上海にせよ、他の都市にせよ、近代中国都市の発展が現わした伝統的な都市との異なるところの一つは、社会と個人、他人と自己、個人と集団との関係の中に新しい構造が生じ、人々が集まる際、新しい原理が生まれ、人々を「一群」として定義する組織が生まれる。この構造上の原理は、社会的組織の中に現れた新しいゲームのルール（organizing principles）である。これらの新しいルールの出現は、都市が都市となり、現代化都市となる大きな原因であるかもしれない。

以上の二種類の論文をさらに細かく分類すれば、近代中国都市の中に現代性に密接に関わっている舶来品消費と娯楽文化、都市空間と産業の変遷、新しい社会団体の出現、新興職業人の誕生、および都市と宗教の関係を含みいくつかの点が見える。以下、それぞれを簡単に説明してみよう。

## 舶来品消費と娯楽文化

中国の「現代性」の最も重要な特徴の一つは中国と舶来文化との関係である。これは欧米の工業先進国にとって問題にならないが、しかし、中国や多くの工業後進国にとって、「現代性」と舶来文化の衝撃は同時に発生したとしばしば考えられるため、「現代性」に対する議論はいつも「洋」の要素から抜けきれない。以前、中国近代以来の歴史発展の原動力について、西洋学者は様々な解釈があり、最初の「挑戦——応戦」というモデルは外的衝撃を強調したが、その後の「現代化」理論が強調したのは中国の「西洋化」モデルである。いずれも欧米列強が近代中国に大きな影響を与えたと考えた。中国知識人の「華洋」関係に関する構想は、19世紀半ばの「中体西用」説にせよ、五四時期の「全面的西洋化」説にせよ、いずれも政治思想の面から着手したものである。ところが「華洋関係」が日常生活にどのような影響を与えたかについての検討は少なかった。本論文集の中に頼恵敏氏、鄭揚文氏、張寧氏の三つの論文は、切り口として庶民の消費と娯楽活動の面から改めて「華洋関係」を検討する。

頼恵敏氏は档案史料を利用し、乾隆時代北京の舶来品と旗人の日常生活を分析し、特に毛織物とガラスを重点的に論じた。頼恵敏氏の論文は過去の経済史学者が中国の気候が暖かくて、英国の毛織物が売れなかったため、阿片を主要な輸入品にしたとする学説を修正し、さらに阿片戦争以前に中国人がすでにたくさんの西洋舶来品を消費し始めたことを明らかにした。彼女の研究は次のことを明らかにした。乾隆時代に英国から毛織物とガラスなどのたくさんの商品が輸入され、北京の旗人の間に「西洋の毛氈（フェルト）がクロテンに勝る」という諺が出るほど、北京市民の生活に大きな影響を与えた。旗人家庭に所蔵されたガラス製品も非常に豊富である。また、北京のチベット仏教寺院も西洋から輸入された毛皮とガラスを使って飾り物を作った。これでわかるように、中国は保守的に舶来品を排斥したりはせず、舶来品は十八世紀の北京の旗人の間に流行し、舶来品を模倣した新しい器物がたくさん作り出された。

鄭揚文氏も舶来品を論じる。彼女は清初から民国、さらに現在までの舶来品の近代中国における系譜を探ろうと考えている。彼女の主な核心問題は次のとおりである。なぜある舶来品はうまく現地化されたのか、なぜある舶来品は輸入されて間もなく消えてしまったのか。彼女は次のように考えている。経済学の角度から見れば、ある商品が単一階層で流行しても、その消費文化（consumer trend/culture）が確立したとは言えない。必ずその流行が他の社会階層に広がり、都市から非都市地域に広がり、特に小売市場が現れてこそ、はじめてその消費文化が確立したと言える。この基準に基づき、彼女は洋菊、洋桃、時計、洋布、自転車、ビール、洋館な

どの商品を検討し、清朝から民国までの上述した様々な舶来品が中国に輸入された後に如何に選ばれ、淘汰されたかを分析し、そのパターンを明らかにしようとした。論者は舶来品が中国に輸入された後、選ばれるパターンがさまざまあり、ただ中国人の衣食住などの生活習慣に合うものだけが階層や都市・農村の境界を越え、一部の人間の賞玩収蔵品から日用品へと変身し、完全に現地化され、本来の舶来の意味が消えたと指摘している。

張寧氏が研究したハイアライを使って「心理を読む」ことは、本国の伝統が如何にして舶来物質を現地化させるかの実例を表していた。ハイアライは1930年代に上海に輸入された後、多くの洋式賭博の中に重要な位置を占めた。ハイアライが都市生活に密接に関わった理由は、ある程度の現代性を帯びていたからである。まず、ハイアライの競技場の外観自体はいわゆる「声・光・化・電」<sup>訳注4)</sup>を表し、人々にモダンな感覚を与えた。さらにハイアライが表した強烈的な「光・熱・力」、特にスピード、及びそれによって生じた強烈的な刺激感、上海の都市生活に欠かせないものとなった。日中戦争が勃発した後の上海は孤立地区となり、心中鬱屈した都市住民は刺激を求めるため、ハイアライの競技を過熱化させた。一部のファンは賭博理論を作り、勝利の鍵が「球筋」——球場当局の心理——を当てるかどうかにあると考えた。知恵と技術に着目したことは正しく中国知識人の博奕の面での伝統である。実際のやり方は、当時の「花会」という伝統的な博奕の中の「心理を読む」という考え方に近い。そこから分かるように、在地の消費者たちは最も「西洋的」であると同時に、現代性の特徴を有しているものを、その痕跡を留めずに伝統的な博奕と結合した。彼女の研究は伝統と現代の相互依存関係、及び近世以来の都市舶来文化の特徴を明らかにした。

近代中国都市に現れたデパートも一種の舶来消費文化に属する。しかし、デパートがもたらした現代性は、「声・光・化・電」だけではなく、また性別の役割を変えた。連玲玲氏の論文は読者の視線をデパートから消費者、特に女性消費者に移した。デパートの出現は女性に正当化した公共空間を作り、その中でショッピング、娯楽、社交活動をするを可能にした。それによって女性は家庭資源の配分上より大きな自主性を有した。ところが、資本家の営業戦略の下で、デパートは女性消費者の天国だけではなく、女性を消費する場でもある。男性の顧客がデパートになだれ込んだのは、ただ若い女性店員を見るだけであり、タブロイド新聞の記者たちは読者の注目を寄せるため、女性店員の風流韻事を報道した。デパートの事例の中には、女性は消費の主体であると同時に消費の対象であった。われわれは改めて消費者の自主性の問題——消費はどれほどアイデンティティを主張するか——を考えなければならない。ジェンダーは

主体と対象を転覆する分析道具であり、連玲玲氏の論文はわれわれに新しい角度から都市の社会史を再認識しなければならないことを悟らせた。

## 都市空間と産業の変遷

以前、中国近現代都市史研究は、都市の空間問題に触れる際、よく都市計画の角度から検討した。本書の二つの論文は期せずして蘇州を研究対象としたが、しかしそれが着目するのは都市空間と産業変化との関係である。

まず、観光業と都市空間についての論述である。現代の観光業（ツーリズム）は十九世紀に現れて以来、およそ商品化、制度化、普及化、速やかな空間移動などすべては現代性の特徴を呈した。巫仁恕氏の論文は、現代観光業が形成される以前の明清時代に、すでに豊かな遊観文化があり、多くの現代性の特徴を見つけることもできることを明らかにしている。1920年代に至り、中国で最初の現代的な旅行会社が設立され、西洋の現代観光業のメカニズムが正式に中国に導入された。本書が触れた舶来品市場やハイアライやデパートなどと同じように、近代都市は新式の娯楽業に良好な発展環境を提供した。旅行空間の変遷について言えば、明末から清末まで、蘇州の旅行空間の拡大あるいは縮小は、実は都市経済の発展に密接に関わっている。1920年代の蘇州旅行活動はすでに現代化に邁進し、機関車やモーターボートなどの現代的交通手段があり、旅行の時間が短縮され、また現代的な旅行会社が設立された。たとえそうであっても、蘇州の観光スポットは依然として明清時代の城内と郊外に位置する名勝古跡であり、新しい景観は少なかった。そこから分かるように、現代蘇州の観光スポットは依然として伝統的な空間を突破し難かった。その上、現代になって、明清時代のランドスケープは古跡となり、伝統的文化の象徴として国家・民族のアイデンティティの確認と構築の意味を与えられたと同時に、現代的観光業の重要な観光スポットであった。従って、論者は現代蘇州の観光業は実は明清時代の伝統的な遊観文化に基づいたものであり、「伝統を消費する現代的観光事業」(tourism of consuming tradition)と言えると指摘している。

柯必徳氏の論文はより古い職業——売春——と都市の関係を検討し、蘇州妓院が1890年から1930年の間に場所移転・廃止・合法化を経た過程を明らかにした。明清時代の蘇州は青楼文化が盛んであり、北西の閶門の内側に集中し、蘇州の有名な景観となった。二十世紀に入って、蘇州城外の閶門と胥門の間に新式の大通りが建設され、当地の経済を繁栄させるため、地方官と商人は本来閶門内の妓院をそこに移転させることを主張したので、蘇州の妓院はやむを得ず移転され、当地の商業を促進さ



せるようになった。さらに、妓院が納めた印紙税は地方政府の重要な財源である。しかし1920年代、特に南京国民政府の統治時期になって、国民党婦人部と他の社会改革団体が積極的に売春禁止を提唱し、たとえ財政収入にかなりマイナス影響があっても、蘇州市政府は1929年に売春禁止令を執行した。ところが、商人たちは売春禁止が大通りの不況をもたらし、売春活動も地下化したと認識した。そこで、大通りの商人たちは民生社を創立し、売春を合法化させ、当地の繁盛ぶりを復興させようと政府に嘆願した。結局、蘇州は1932年に新しい公娼制度を行い、妓女を三等級に分け、登録させた後に納税させ、正式に合法化した。

彼の分析により、売春業は元々伝統的な道徳と現代社会改革者に「悪」と考えられる職業であるが、官員・縉紳・商人たちが一致した考えの下、都市経済を活性化する重要な原動力となったことがわかる。観光業の発展と同じように、蘇州の伝統的時代から継続してきた産業が、都市の現代化するプロセスの中に、重要な役割を果たした。

## 新しい社会団体の出現

中国の都市は明清時代以来、都市を中心にする会館・公所（訳注5）・行幫（ギルド）などの民間自治団体が出現した。近代以降、多くの大都市にまた新しい形態の社会団体が現れ、例えば本書の中に王迪氏が論じた成都の茶社業公会、及び孫慧敏氏が検討した上海の借家人連合会は、いずれも非常によい事例である。近代中国都市の社会団体の研究は主に二つの面から問題に切り込む。一つは「市民社会」理論の啓発を受け、都市社会団体が如何にして公共事業の参加を通し、次第に自主性と自治性を確立したかを検討する。そしてこれらの社会団体が中国政治民主化の推進者としての可能性を考える。もう一つは「共同体」の形態の角度から、都市社会団体が如何にして各地から都市にやってきたよそ者を集結し、新しい社会的政治的秩序を作り出し、血縁と地縁を超える集団意識（特に市民意識ないし国民意識）を形成したかを観察する。<sup>10)</sup>

先行研究の多くが都市社会団体の「公益」の側面、あるいは公益的社会団体に重点を置いて論じるのに対し、孫慧敏氏と王笛氏は都市社会団体が「自らの集団」の権益を守る本質をより強調した。孫慧敏氏と王笛氏はそれぞれ上海の借家人連合会と成都の茶社商業同業公会を事例とし、1920年代上海の借家人と1940年代成都の茶館業者が如何にして自分の居住権と経営権を守ったかを検討した。成都市茶社商業同業公会は清末の商幫から転換してきて、十六世紀以降の同郷と同業関係を兼ねる会館・

公所の伝統を継承したものである。しかし、1931年、1936年に法律に準拠して改組され、完全に経済的組織に変わった。1920年代以後、上海市の横町の中に盛んであった借家人連合会は依然として同郷・同業関係が存在していたが、しかし、最も強調されたのは彼らの都市の中で共有した借家人の身分と互いの近隣関係である。以前の各種の都市社団組織に比べ、その社会的紐帯は借家人連合会にいっそう著しい「都市性」(urbanity)を露呈させている。この二つの事例は近代中国都市と明清時代の伝統的な都市との異なる現代性的特徴、つまり社団組織の面でより同業性と在地化の傾向を呈したことを明らかにしたかもしれない。

それ以外に、この二つの事例はいずれも都市社団の逃れられない現実を表している。つまり彼らは必ず国家・政府・政党の力に直面し、「交渉」(negotiate)してこそはじめてその願いを実現できる。王笛氏は民国時期、特に日中戦争と内戦時期の同業公会が益々国家から与えられた権力を以て同業組合の規約を守るようになり、以前の行会に比べ、茶社業公会の独立性と自治性が大いに減少し、国家の社会組織に対する支配が明らかに益々強化され、都市社会の末端まで浸透し、明清時代の都市と同時期の農村を遙かに超えたと指摘している。実は公会と地方政府の関係は互いに利用する関係にあり、二者はなるべく交渉を通して直接対立を避けた。その理由は政府も公会を媒介として、政令を社会の末端まで貫徹させる必要があるからである。また、上海の借家人連合会のように、成立当初から請願を通して政府の許可と支持を目指して努力した。それ以外に、国民党はかつて一度1926年の武漢で行った組織動員の経験を活かし、上海の家賃減額運動を進めた。ところが、孫慧敏氏も指摘したように、国共両党の影響力を誇張しすぎてはいけない。その理由は政党組織に「指導」される借家人団体が政党政策の変更に伴い、彼らの立場も共に変化したからである。1927年の家賃減額運動の主力となり、さらに続けてやっていたのは、実はやはり横町型の借家人連合会である。そこから分かるように、近代中国都市の社団組織はまたある程度の自主性を持ち、依然として政府と交渉する余地を有していた。

## 新興職業人の誕生

近年、一部の研究成果は、近代中国都市に現れた多くの特殊な専門知識を以て生計を立てる新興職業人を研究対象とし、弁護士・医師・エンジニア・会計士・新聞記者・大学教授などを含む新興職業に従事する人物の業務活動、および都市の中に他者と自己を区別する身分的象徴としての「職業」が如何にして大衆社会を牽引する原

動力となったか、その発展の過程を検討した。これらの新興職業人たちは自分なりの結社組織を作りだし、対内的には成員たちの凝集力を強化し、対外的には政治勢力と交渉したり対抗したりした。一般には、これらの団体は互いに同質性が低く、存続の歴史も相対的に短かったと思われるが、ところが、その行動を総合的にみれば、それは中国都市社会が成熟したことを表している。これらの人物の出現は現代化と資本主義的経済発展の結果であり、彼らは自らの利益を守るため、国の許可を求め、国も現代化建設を推し進めるために喜んで彼らと提携し、双方それぞれが適所を得た。<sup>11)</sup> この重要な課題について、本書には三篇の論文がある。徐小群氏、林美莉氏、岩間一弘氏の新劇役者と会計士と民営企業職員の三種の新興職業人に関する論考である。

新興職業人の出現と活動は、近代都市経済の発展に密接に関わっている。中国本土の会計士が出現したのは、近代中国都市に現れた自国の工商企業が本国の会計士に多くの機会を提供したからである。また、プロの新劇役者が都市にしか定着、成長できなかったのは近代以降の都市と農村の物質文化上と教育上の差異に関わっているからである。役者の標準語使用や劇場の設備と演劇の商業化などは、いずれも都市の環境の下ではじめてその条件を備えた。従って、プロの新劇は近代都市文化の一部となり、都市住民である消費者の中に、民営企業の職員が相当多数を占めた。これでわかるように、いわゆる都市と農村との格差は近代以降に次第に広がり、伝統的な都市・農村の一体化の様子とまるで違っている。二十世紀の二、三十年代に至って、都市の中に新しい社会階層が形成された。

新興職業が「新」と言われる理由は、伝統と相関する職業の従業員との間に大きな差異があるにある。例えば、伝統的戯曲の役者に比べ、プロの新劇役者は演劇の改良と芸術性をより強調した。会計士と伝統的な勘定方との違いは、業務を行う時に原価計算のような現代的観念を有することにある。しかも、民営企業職員を含めて、ますます多くの新興職業人を自任する人々は、都市の中で生産し、都市の中で消費し、常に「現代的」生活経験と社会意識を体現し、さらに一歩進んで己の経験を以て時代の「現代性」を体現した。それ故に、個人の最初の動機についていえば、新興職業人はもとより生計を立てることを目標とするが、しかし、われわれがその究極的関心を探求すれば、まさに近代中国社会の現代化への可能な道を見つけるであろう。

近代中国都市は新興職業人にその抱負を実現する舞台を提供したが、彼らも多くの問題にぶつかった。その中の最も顕著な現象の一つは、「新」に対する標榜と追求が「旧」からの冷眼と敵意を招いたのである。林美莉氏が描いたように、たとえ近代的な新型の企業であるとし

ても、会計士をまったく信用せず、むしろ伝統的な勘定方を使って帳簿を管理する企業主は少なくなかった。会計士も常に社会的非難を浴びせられ、資本家の脱税を補助する共犯者と見なされた。さらに重要なのは、政治勢力がこの伸張し続ける勢力に対してずっと警戒心を持ち、大きな圧力を以てその発展の勢いを阻止しようとした。林美莉氏は会計士の存廃に影響を与えた最大の外的要因が政府の政策と政治勢力の介入であり、国民政府の税制改革が会計士に希望の光をもたらし、とりわけ重慶時期に大繁盛したが、しかし、1957年以降、会計士は共産党政府から右派分子と規定され、歴史の舞台から姿を消したと指摘した。岩間一弘氏の論文は民営企業職員の状況をさらに明らかにした。1949年以降、民営企業職員は政治の干渉を受け、共産党に動員され導かれて闘争を行い、「政治パフォーマンス」を適応や生存の手段とした。政党の力により強く改造された後、新興職業人は次第に自主性を失い、国家の管理システムの中に統合され内包された。

## 都市と宗教

今までは都市の社会史研究に関して多大の成果を上げてきたが、しかし、宗教の役割は過小評価されているようである。例えば、一時盛んに議論された中国都市の「公共圏」(public sphere)について、多くの学者は会館・公所のような社会組織の重要性を強調したが、宗教的社団組織の役割に妥当な評価を与えなかった。<sup>12)</sup> ところが、本書所収の論文が明らかにしたように、宗教信仰の活動は中国近代都市の中の最も重要な公共活動の一つである。これは中国の「公共圏」や「市民社会」に関するいかなる議論であれ、宗教活動の重要性を無視すべきではないことを意味している。<sup>13)</sup>

すでに一部の学者が注目しているように、都市のエリートが慈善活動を指導したり、それに参加したりすることを励ますには、宗教信仰はとても重要な要素である。都市のエリートを研究する史料が新聞や雑誌や档案の中に散在し、彼らの宗教信仰に関する資料があまり多くないため、彼らの宗教信仰と宗教ネットワークは軽視された。<sup>14)</sup> しかし、明清時代からすでにエリート階層が仏教思想の影響を受け、積極的に善会や善堂などの慈善救済団体を組織したことを窺い知ることができる。<sup>15)</sup>

本論文集の中の三篇の論文が上述した問題に言及している。鄭観応(1842-1922)は近代中国の著名な啓蒙思想家と実業家であり、これまで現代化の推進者と認められてきたが、しかし、上海での長期滞在中、鄭観応は同時に求道や扶鸞(占い)や弁善(慈善事業を行う)や求仙を行った。以前の研究者はこの「進歩」に合致してい



ない側面に対し、ほとんど簡単に触れるだけであるが、范存武氏はそれを宗教史の文脈の中に、とりわけ清末民初の上海善堂ネットワークと関連して分析した。鄭観応が慈善活動を行った場としての上海善堂は、実は鸞堂と互いに結びついている。鄭観応の積極的に時世を救う巨大な原動力は宗教の力からきたのである。彼は豊富な求道の経験があるため、扶鸞も篤信し、鸞堂から発展してきた劫変思想と救世理論も信じた。鄭観応からわれわれは再度伝統的な宗教観と現代の「進歩」思想が共存することを窺い知ることができる。

Paul Katz（康豹）氏は王一亭氏（1867-1938）の事例研究を通し、清末民初の上海エリートが現代中国の変化と発展に直面した時、如何にして伝統的な宗教信仰を調和し、宗教的实践を通して社会的エリートの地位を確立しようとしたかを論じた。論者は王一亭の生涯と仏教思想を詳述するだけではなく、王一亭が仏教の慈善活動を組織し、「扶乩」<sup>訳注6</sup>を通して宣教する特色に注目した。これによれば、伝統と現代が現代都市エリートの一身上に共存しているという多元文化の特徴、現代中国の都市社会と都市文化の特殊な現代性を明らかにした。

劉迅氏は陳撈寧（1880-1969）を事例として、陳氏が1930年代から40年代の間に上海で提唱した道教改革運動を分析した。陳撈寧は思想上では、仙学は養生も救国もできると主張し、道教思想の歴史的文化的地位を高め、儒教・仏教からの批判に反撃し、さらにそれを以て舶来文化に対抗しようとした。同時に、現代科学を以て道教の外丹を研究し、ひいては実験室を作り、道教の外丹が現代化学の先駆的地位を有することを訴え、当時の科学者たちの首肯を得た。さらに、彼はまた現代の科学的用語と観念を用い、道教の内丹思想を解釈しようとした。論者は陳氏が現代科学と伝統的な道教の身體修練と宇宙観を融合し、このような融合的や選択的改革を通し、改めて現代性の道教的言説を構築したと指摘した。これによって、現代中国都市エリートが西洋化に賛成し宗教や迷信に反対するとする従来の見方は、実は歴史的事実と若干食い違うことを明らかにした。

振り返って都市化が宗教の発展に及ぼす作用を見ると、上述した三篇の論文からも近代以降の中国都市の発展が伝統的な宗教の発展により多くの養分を与えたことを窺い知ることができる。特に上海について、康豹氏の論文には1910年代から1930年代の間に、多くの近代的仏教団体と新興宗教団体（学者に「救贖団体」と呼ばれる）が現れ、これらの団体が都市を根拠地として、相当広い社会的ネットワークを構築したことに言及した。例えば、鄭観応が上海善堂ネットワークに基づいて創立した「上海弁賑公所」は、省境を越えて救済活動を行う際、その重要な機能を発揮したと、范純武氏は指摘した。都市内の近代的メディアはまたこれらの宗教団体の

一層密接な連携と結合に貢献した。劉迅氏が指摘したように、上海の近代的出版メカニズムは月刊や月報のようなメディアを通し、民国初年に都市を中心にして道教の公共空間（Daoist public space）を創出した。このメカニズムはまた地域と社会階層の境界を超え、修道に志すものに個人的経験を共有させ、一つの想像上の共同体（imagined community）を形成させた。それによって伝統的な道教の修道モデルを変え、伝統的な修道活動の中の性差を突破した。

## 結び

本書の研究成果は、従来の近現代都市史研究に比べ、少なくとも三つの特色がある。まず、先行研究の多くが現代化の角度から近現代中国都市史の発展を解釈し、都市管理と都市計画を強調し、あるいは都市内部の中産階級や商工業者に重点を置いて研究するのに対し、本書は現代性の角度から消費・娯楽・職業・社会团体などの物質的な側面だけではなく、宗教信仰の精神的な側面を含む都市の人々の日常生活により注目した。

次いで、解釈の面において、以前のように国家と社会の二元対立を事前に設定せず、二者の関係も誇張せず、より緻密な分析を通し、二者の相互作用を強調した。特に都市の「集団」研究について、本書のいずれの論文も現実的利害の傾向の角度から、都市の社会構造の特質を検討し、都市内部の社会関係の変化が如何にして近代都市の公共政策に影響を与えたかを明らかにした。とりわけ集団と政治とのみ合いは本書に言及したが、今後のさらなる研究を期するものである。

最後に、本書は従来の中国近代史の歴史時期区分法から脱却し、伝統と現代の関係を改めて考えようとした。その結果、現代都市の観光業と性産業のような一部の「現代性」的に見える事柄が実は伝統の延長にあることを明らかにした。例えば、われわれは以前ずっと「華洋」の問題が十九世紀以降になってやっと注目されたと思っていたが、実はその問題は早くも明清時代にすでに現れ、しかも「華洋」の二者は必ずしも対立しなかった。西洋の新しい文化の輸入にあたり、新奇なる舶来品にせよ、ハイアライのような外来娯楽にせよ、いずれも伝統に繋がらなければ定着できない。新と旧の錯雑と融合はまた宗教・信仰からも窺い知ることができる。現代性の啓蒙や理性と科学などは、元来、中国の伝統的な宗教の思想と実践と明らかに矛盾衝突するはずにもかかわらず、都市の知識人と新興の宗教団体により奇妙に解決され昇華された。

本書は都市史の発展から中国の多元的現代性を見たが、なお多くの検討すべき未解決の問題がまだ残され

ている。例えば、中国都市の現代性が如何にして伝統の中から兆したか、現代性の要素の中に伝統の割合がどれくらいあるか、また完全な舶来の割合がどれくらいあるか、中国都市から発展してきた新旧融合の多元的現代性がどれほど特殊性を持つのか、それが「中国の現代性」を代表できるか。本書が扱った上海・蘇州・成都・北京の四都市は近現代中国の多元的都市性（multiple-urbanity）を明らかにして見せたが、このような多元性も一種の不確定性なのか、あるいは中国近現代の発展の中では、固定したあるいは理想的な中国都市形態というものとは存在せず、そこに露呈しているのは多元的多段階的な都市の様相であると言えるのであろうか。それ故に、他国と異なる中国都市の現代性の特徴を如何にして著しく示すか、中国国内の都市に現れた多元的現代性を如何にして解釈するか、これらのいずれもが本書が解決できなかった重要な問題である。

都市自体も大型の舞台劇と同じように、行ったり来たり、登場したり退場したりする様々な役割があり、急激に変化する照明と音楽がある。この書は単なる始まりであり、終わりではない。成功か否かに関わらず、いずれも本研究チームの先行研究に対する反省、未来の新しい研究方向への試みを表現している。

## 謝辞

本稿を完成させるにあたり、中央研究院近代史研究所都市研究チームの同僚全員に、特に、当時、シンポジウムの総合討論の司会を務めた高彦頤教授に感謝の意を表したいと思います。また、本書が提出した後、三人の査読者から多くの貴重なご意見をいただき、ここで併せて御礼を申し上げます。

## 付録 『從城市看中国的現代性』 “The City and Chinese Modernity” 目録

導論	
主題一：都市生活与文化（Urban Life and Culture）	
頼惠敏	乾嘉時代北京的洋貨与旗人日常生活
鄭揚文	清代洋貨的流通与城市洋拼嵌（mosaic）的出現
坐仁恕	從遊觀到旅遊：十六至二十世紀初蘇州旅遊活動与空間的變遷
柯必德 (Peter J. Carroll)	二十世紀初期蘇州的花柳区
連玲玲	女性消費与消費女性 — 以近代上海百貨公司為中心
張 寧	「賭心思」：民国時期上海的回力球賽
主題二：社会团体与城市動力（Social Organizations and Urban Dynamics）	
孫慧敏	「房客聯合会」与1920年代上海的房屋減租運動
王 笛	民国時期同業組織与地方政府關係：以成都市茶社商業同業公会為例
劉 迅	修煉与救国：民初上海道教内丹城市信衆的修行，印刷文化与团体
范純武	飛鸞，修真与弃善：鄭觀応与上海的宗教世界
康豹 (Paul R. Katz)	一個著名上海商人与慈善家的宗教生活：王一亭
徐小群	城市職業与城市文化：業余和職業話劇在 1920-1930年代的興起
林美莉	近代中国本土會計師執業空間的拓展：以立信會計師事務所的業務活動為例，1927-1945
岩間一弘	在表演和宣傳之間 — 上海民營企業職員階層的重組与群眾運動，1949-1952



## 訳注

1. 論文集は2009年内に出版する予定である。本論はその論文集の導論である。著者巫仁恕氏は、中央研究院近代史研究所副研究員。
2. 道台は道員の敬称、清朝では省に属する地域および職種別の監督長官で、身分だけは知事より上だった。
3. jai alai. 回力球ともいわれる賭け事の一つ。室内にスペイン特産の堅い石または大理石で壁をつくり、ボール(コルクを木綿糸で巻き皮革で包んだもの)を壁に、交互に打ちつけて争い、その競技の勝敗を対象として賭ける。スペイン北部で古くから行われていた類似の競技がしだいに改良されたもので、スペインのほかフランス、イタリア、アメリカ、フィリピンその他ラテンアメリカ系の諸国で行われている。
4. 清末民初の新名詞。西洋伝来の自然科学と技術を指す。
5. 会館・公所は、商工業などの同業者や同郷者の団体が親睦・互助のために建てた建物で、建物内には事務室・会議室の他に宿泊施設や倉庫もあった。会館・公所は最初は建物を指したが、後には同業者や同郷者の団体そのものも指すようになった。ちなみに、会館は同郷者組織であり、公所は同業者組織である。
6. 扶乩は、筆を上から吊したり、木の棒を手で支えたりして、砂や線香の灰を敷いた盤の上に漢字や記号などを描き出し、それを読み取って解釈し、神霊からのメッセージとする。明清時代、扶乩は身近な占いの手段であり、自宅や廟、宗教結社のみならず、時には役所や書院のような公的な場所においてさえ気軽に行われた。また扶乩は占いとしてだけでなく、扶乩を介して降りたおびただしい神仙の教えが、「善書」という形をとって広範な地域と階層に流布することによって、大衆的な宗教倫理観念の確立に大きな役割を果たした。扶箕、扶鸞、揮鸞、降筆、請仙、卜紫姑神とも呼ばれる。志賀市子『中国のこっくりさん——扶鸞信仰と華人社会』(大修館書店、1999年)を参照。

## 注

1. Christian Henriot, "Cities and Urban Society in China in the Nineteenth and Twentieth Centuries: A Review Essay in Western Literature," 『近代中国史研究通説』, 第21期(1996年3月), 頁151-175, 参照。
2. 張仲礼「關於中国近代城市发展問題研究的回顧」, 張仲礼・熊月之・沈祖焯主編『中国近代城市发展与社会經濟』(上海: 上海社会科学出版社, 1999年)所収, 頁9。
3. 隗瀛濤主編『近代重慶城市史』(成都: 四川大学出版社, 1991年), 「緒論」, 頁12-15。中国大陸の近代都市史研究について、劉海岩「近代中国城市史研究的回顧与展望」(『歴史研究』, 1992年3期, 頁14-30)や鍾建安・陳瑞華「近年来中国近代城市史研究綜述」(『社会科学評論』, 2007年4期, 頁114-119)を参照。
4. Bryna Goodman, *Native Place, City, and Nation: Regional Networks and Identities in Shanghai, 1853-1937* (Berkeley; London: University of California Press, 1995); Kwan Man Bun, *The Salt Merchants of Tianjin: State-Making and Civil Society in Late Imperial China* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2001); Ruth Rogaski, *Hygienic Modernity: Meanings of Health and Disease in Treaty-Port China* (Berkeley; London: University of California Press, 2004)。
5. 最近十年來の欧米学界の研究成果は、Charles D. Musgrove, "Review Essay: The Nation and Daily Life in Modern Chinese Cities," *Journal of Urban History*, 33.4 (2007): 620-632を参照。
6. これらの要素は自由と民主国家の興起、および支配的地位を

- 有する世俗化、民族主義、資本主義、工業化、都市化、消費意識、科学主義などを含む。Michael Saler, "Modernity and Enchantment: A Historiographic Review," *The American Historical Review* 111: 3 (Jun. 2006), pp. 692-716を参照。
7. Daniel Miller, *Modernity, an Ethnographic Approach: Dualism and Mass Consumption in Trinidad* (Oxford: Berg, 1994), pp. 76-80.
  8. David Strand, "New Chinese Cities," in Joseph W. Esherick, ed., *Remaking the Chinese City: Modernity and National Identity, 1900 to 1950* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2000)。
  9. Björn Wittrock, "Modernity: One, None, or Many? European Origins and Modernity as a Global Condition," *Daedalus* 129.1 (2000): 31-60; S. N. Eisenstadt, "Multiple Modernities," *Daedalus* 129.1 (2000): 1-30; 中国語訳は曠新年・王愛松訳『反思現代性』(北京: 生活・読書・新知三聯書店, 2006年), 頁36-66。
  10. 朱英「近代中国的「社会与国家」: 研究回顧与思考」, 『江蘇社会科学』2006年6期, 頁176-185。小浜正子『近代上海の公共性と国家』, 東京: 研文出版, 2000年。岸本美緒「市民社会論と中国」, 『歴史評論』527期(1994年3月), 頁56-72。Mary B. Rankin, "Some Observations on a Chinese Public Sphere," *Modern China*, Vol. 19, No. 2 (Apr., 1993), pp. 158-182.
  11. この課題に関する関連討論は、徐小群氏、朱英氏、孫慧敏氏、陳同氏、雷祥麟氏、連玲玲氏、岩間一弘氏、林美莉氏、魏文享氏などの研究を参照。Xiaoqun Xu, *State and Society in Republican China: The Rise of Shanghai Professional Associations, 1912-1937*, Ph.D. Dissertation of Columbia University, 1993。徐小群『民国时期的国家与社会: 自由職業団体在上海的興起, 1912-1937』(北京: 新星出版社, 2007年)。孫慧敏「建立一個高尚的職業: 近代上海律師業的興起与頓挫」, 2002年台湾大學歷史學研究所博士論文。陳同「社会變遷中的上海律師」, 2004年香港中文大學歷史課程哲學博士論文。Sean Hsiang-lin Lei, *When Chinese Medicine Encountered the State: 1910-1949*, Ph.D. Dissertation of Chicago University, 1999。岩間一弘「民国期上海の新中間層」, 2005年東京大學博士論文。Ling-ling Lien, *Searching for the "New Womanhood": Career Women in Shanghai, 1912-1945*, Ph.D. Dissertation of University of California, Irvine, 2001。朱英「近代中国自由職業者群体研究的幾個問題——側重於律師、醫師、會計師的論述」, 『華中師範大學學報』(人文社会科学版)卷46期4(2007年7月), 頁65-73。林美莉「專業与政治: 上海會計師公会与国民政府的互動, 1927-1931」, 『近代中国: 經濟与社会研究』(上海: 復旦大學出版社, 2006年6月), 頁497-516。魏文享「近代上海職業會計師群体的興起——以上海會計師公会為中心」, 『江蘇社会科学』2006年第4期, 頁198-205。
  12. Mary B. Rankin, *Elite Activism and Political Transformation in China, Zhejiang Province, 1865-1911* (Stanford: Stanford University Press, 1986); William T. Rowe, "The Public Sphere in Modern China," *Modern China*, 16.3 (1990): 309-326; William T. Rowe, "The Problem of 'Civil Society' in Late Imperial China," *Modern China*, 19.2 (1993): 143-153; R. Keith Schoppa, *Chinese Elites and Political Change: Zhejiang Province in the Early Twentieth Century* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1982); David Strand, *Rickshaw Beijing: City People and Politics in 1920s China* (Berkeley: University of California Press, 1989)。
  13. さらに多くの関連研究は、Martin C. Yang, "Between State and Society: the Construction of Corporateness in a Chinese Socialist Factory," *Australian Journal of Chinese Affairs*, 22 (1989): 35-36。Kenneth Dean, "China's Second Government: Regional Ritual Systems in Southeast China," 王秋桂・莊英章・陳中民編『社会民族与文化展演國際研討會論文集』(台北: 漢學研究中心, 2001年)所収, 頁77-109を参照。

14. 例えば、Mary Rankin氏は清末のエリート研究には、彼らの社会的活動の自主性（activism）を強調する一方、その宗教領域での活動を視野の外に置いた。Rankin, *Elite Activism and Political Transformation in China, Zhejiang Province, 1865-1911*, pp. 143-147を参照。また、朱濤氏は清末華北のエリート階層の救荒活動を研究する際、多くの紙幅を費やして「福報」の観念を論じたが、その観念と仏教思想との関連性に気づかなかった。朱濤「江南人在華北——從晚清義賑的興起看地方史路径的空間局限」、『近代史研究』、第5期（2005）、頁114-148を参照。
15. Joanna Handlin Smith, “Benevolent Societies: The Reshaping of Charity during the Late Ming and Early Ch’ing,” *The Journal of Asian Studies*, 46.2 (1987): 309-338; Joanna Handlin Smith, “Chinese Philanthropy as Seen through a Case of Famine Relief in the 1640s,” in Warren F. Ilchman et. al., eds., *Philanthropy in the World's Traditions* (Bloomington: Indiana University Press, 1998), pp. 133-168を参照。また、Andrea Janku（燕安黛）, “Sowing Happiness: Spiritual Competition in Famine Relief Activities in Late Nineteenth-Century China,” 『民俗曲芸』, 143 (2004) : 89-118を参照。